

第二部

平成 26 年度すぎなみ教育シンポジウム報告

「地域と共にある学校－対話と協働と創造の教育を目指して－」

平成 26 年度すぎなみ教育シンポジウム

地域と共にある学校 –対話と協働と創造の教育を目指して–

プログラム

平成26年12月20日(土)13:30~16:00 勤労福祉会館ホール

<p>第 1 部</p> <p>13:30 14:00</p>	<p>主催者挨拶</p> <p>杉並区教育委員会教育長 井出 隆安</p> <p>地域運営学校成果検証調査の結果概要</p> <p>【講師】文教大学人間科学部教授 金藤 ふゆ子 氏</p>
<p>第 2 部</p> <p>14:00 15:10</p>	<p>シンポジウム「地域と共にある学校–対話と協働と創造の教育を目指して–」</p> <p>【進 行】 生重 幸恵 氏 (天沼小学校・天沼中学校学校運営協議会委員・文科省第7期中央教育審議会委員)</p> <p>【登壇者】 金藤 ふゆ子 氏 (文教大学人間科学部教授) 長 俊介 氏 (富士見丘中学校学校運営協議会会長・日本スクールソーシャルワーク協会会長) 谷原 博子 氏 (桃井第四小学校学校運営協議会委員・同小学校学校地域コーディネーター) 小原 潤 氏 (方南小学校校長・同校学校運営協議会委員)</p>
<p>第 3 部</p> <p>15:10 16:00</p>	<p>記念講演「江戸の教育システムに学ぶ」</p> <p>【講師】東京学芸大学教授 大石 学 氏 (高井戸小学校学校運営協議会会長)</p>

主催者挨拶

杉並区教育委員会 教育長 井出 隆安



本日は、すぎなみ教育シンポジウムにお越しいただき、ありがとうございます。
ます。

また、日ごろから杉並区の教育のために深いご理解とご支援をいただき、
ありがとうございます。この場をお借りして、改めて厚く御礼申し上げます。

杉並区教育委員会では、平成24年3月、「杉並区教育ビジョン2012」を策定いたしました。
ビジョンの基本目標は「共に学び、共に支え、共に創る杉並の教育」です。この、杉並の教育
の目指す方向に向かって、現在さまざまな教育施策を推進しております。

この、「共」を三つ並べた基本目標の要の施策となっているのが、本日のテーマになっていま
す「地域運営学校（コミュニティ・スクール）」と、「学校支援本部」です。杉並区では平成22
年度末に、すべての公立小中学校に志高い区民の皆様のご任意団体として「学校支援本部」が設置
され、多様な活動を展開していただいております。全国的には「学校支援地域本部」として文部
科学省が中学校区を単位に推奨しているものですが、杉並発の取組であり、また小学校を含めて
の全校設置は杉並ならではの密かに自負しております。

私は、こうした地域や社会、保護者と連携した施策が展開できるのは、杉並区が、さまざまな
人材や社会的機能が凝縮した地域であり、また、これまでのまちの歴史の中で育まれた文化があ
るからこそだと考えております。

昭和22年、選挙により杉並区の初代区長となった新居格（にいいたる）区長は、「子どもの
町運動」を先導されました。その運動の呼びかけ文冒頭にはこうあります。「杉並区を「子ども
の事を考える大人」の住む地区とし、その地区に住む子どもたちを自主的にものごとを考え又行動す
る美しい子どもに組織しようと云うのがこの運動の主旨である。「子どもの町」の特徴は「子ども
の町」と云う具体的な施設事業ではなくて、一つの文化運動としてとり行われる点にある。」。
戦後の混乱期にこうした文化運動が発案され、またその後の地域活動やPTAを含む社会教育に
おいて育まれた区民の力が、いまの「共」を基本に据えた教育の取組を支える力になっていると
考えております。

本日のシンポジウムのテーマ「地域とともにある学校—対話と協働と創造の教育を目指して—」
は、杉並区教育委員会が平成17年度から地域運営学校の指定を始めて10年目を迎え、区立小・
中学校全体の4割となる27校まで広がったことから、これまでの取組が、子どもや子どもを取り
まく地域・家庭・学校にどのような成果や影響をもたらしているのかを共有し、平成33年度
全校指定に向けてさまざまな観点から意見を出し合う機会として設定したものであります。シン
ポジウム開催に向けては、地域や保護者の方々のご協力もいただきながら、成果検証のためのア
ンケート調査も行わせていただき、本日、中間報告ではありますが結果の一端を資料として配布
させていただきました。

調査実施にあたっては、本日概要報告をしていただきます文教大学の金藤先生をはじめ、国立
教育政策研究所の岩崎先生、統計数理研究所の土屋先生にご尽力いただきました。詳細は後ほど

金藤先生からお願いしたいと考えておりますが、特徴的だなと感じたことを一つご紹介させていただきます。

学校支援本部が全校に設置されている杉並区において、どういう差が出てくるのか楽しみにしていたのですが、地域運営学校に指定された学校の教員は、自校の児童・生徒の「学習に対する意欲の高さ」や「ルールや決まりが守れる」などについて、より肯定的に評価している、という結果が出てきました。これをどう受け止めるか、議論の余地はあると考えておりますが、私は、地域や保護者との緊張感を持った風通しの良さが、教員の視界を広げ、それが子どもたちの可能性を肯定的に受け止める教育者としての力量を高めてきている表れだと感じました。

ここ数年、「21世紀型能力」ということが言われております。社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程の編成に関する研究のなかで使われているものですが、これまでの言語スキルや数量スキルなどの基礎力の上に、問題解決力や発見力、創造力といった思考力、さらに人間関係形成力や社会参画力といった実践力の育成を期待するものとなっております。教員に求められる能力も確実に変化してきており、これまで以上に子どもを多面的に評価する力量形成、そのためには教員自ら地域や保護者との関係を前向きに作っていくことが欠かせなくなってきました。こうした面からの地域運営学校への期待もできるのではないかと考えているところです。

さて、本日のシンポジウムですが、第一部は、調査結果概要の中間報告を金藤先生にお願いしております。地域に開かれた学校づくりと教員のストレスとの関連調査のご経験もある先生から、地域運営学校の可能性を考える手がかりをいただければと期待しております。また、第二部は、元天沼中学校のPTA会長で現在は文部科学省中央教育審議会の委員もされている生重さんを進行役としたシンポジウムとなります。そして第三部は、現在、高井戸小学校の学校運営協議会会長で、江戸期の大河ドラマの時代考証を数多くされている大石先生から、「江戸の教育システムに学ぶ」としたご講演をいただきます。

一部から三部まで、地域運営学校にさまざまな観点から光を当てて、ご参加いただいた皆様はこの制度への理解を深めていただければと考えております。そしてまた、本日ご参加いただいております地域や保護者の皆様、学校運営協議会委員の皆様、教育研究者や企業・NPOの皆様、そして教育委員会関係者・教職員が、それぞれ教育の担い手であるという当事者意識を高め、それぞれの明日の活動の手がかりとして受け止めていただければ幸いです。

明日21日の「広報すぎなみ」には、いくつかの学校の学校運営協議会委員の公募記事が掲載されます。地域運営学校の制度を有効に活用して、杉並のこれからの学校づくりに、杉並区の教育の発展の為に一層のご理解、ご支援を賜りますことを改めてお願い申し上げ、私の挨拶に代えさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

地域運営学校成果検証調査の結果概要（中間報告）

文教大学 教授 金藤 ふゆ子

本日は、杉並区教育委員会が平成 26 年 5 月から 6 月にかけて実施されました、地域運営学校の導入の成果や影響を明らかにすることを目的とする調査の概要をご説明いたします。

はじめに調査研究の枠組みを簡単にご説明致しまして、次に特徴的な分析結果の一部をご紹介しますというふうに思っております。言うまでもなく、この調査に関わらせていただきまして、本調査は杉並区の地域運営学校の導入の成果や影響の研究を検討するという事において、基礎的な資料になるという風に思われます。それと同時に全国的に取り組みの求められる学校・家庭・地域の連携による教育の成果・影響という事を考える上でも、極めて重要な知見を含んでいるものであると思われます。

研究は、杉並区が地域運営学校の指定を始めて 10 年目にあたるということを踏まえ、これまでの取り組みが子どもたちや子どもたちを取り巻く地域・家庭・学校にどのような成果・影響をもたらしているのかを把握するという目的で進められたものでございます。この 10 年間の成果・影響を解明するために、学校の内部の調査として、「児童・生徒を対象とする調査」、「教員を対象とする調査」、そして「CS 校の校長先生を対象とする調査」、また、学校の外部から支援される方々、または地域の方々を対象とする調査として「地域住民・保護者を対象とする調査」、「学校運営協議会委員を対象とする調査」を行いました。

このように、地域運営学校の取り組みを非常に多角的に、また大規模に調査された取り組みはこれまで全国的に見ても例がないのではないかと私は思います。

【児童・生徒対象調査について】

それでは一部をご紹介しますと思います。まず、児童・生徒対象の調査の結果でございます。地域運営学校に指定された児童・生徒自身に問うた結果でございますが、自己効力感について、自らの成長への期待感、具体的には「失敗の経験を生かすことができる」「自分が頑張ったから良い結果が出たと思う事がよくある」「物事を最後までやり遂げて、嬉しかったことがある」といった児童・生徒の自己効力に関する設問 10 項目を用いて集計が行われております。

回答は「とてもあてはまる」、「まああてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の 4 段階尺度でデータを収集しております。それについて小学校と、中学校では中学 3 年生の場合、自己効力感が「高い」という結果を示す児童・生徒の割合が、「やや高い」を含めて、CS 校の方が非 CS 校に比べて多いという結果が出ております。この 4 区分を示しました通り、平均を出しまして、「高い」が 3.25 以上、「やや高い」が 2.5 以上というような分類をしておりますけれども、小学生・中学 3 年生共に児童・生徒自身が自分に自信を持って学校生活を送っている様子が浮かび上がってきたのではないかと思います。また「学校生活の充実度」ということに関しましても、CS 校、非 CS 校別に見ましたところ、CS 校の児童の方が充実しているという回答率が高いという結果になっております。また、CS 導入年数別にみた中学校 3 年生の

結果を見ましても、CS 以外の学校よりも、CS を導入して5年未満の学校、更に5年以上の学校と年数が増加するにつれまして、自己効力感と同様に学校生活の充実度に関しましても「充実している」と肯定的に回答する割合が高いという関連が見られます。このように、児童・生徒の自己効力感、または学校生活への充実度というものについては、先ほど井出教育長からご説明ありましたように教員の観点から見てもそのようなことが示されている、という結果が浮かび上がっております。

【教員対象調査について】

次に、教員を対象とする調査の結果に移らせていただきます。先生方の観点から見た、児童・生徒の「学習に対する意欲が高い」という項目、また「ルールや決まりが守れる」という項目、また「多様な体験活動に意欲的に取り組んでいる」といういずれの項目におきましても、非 CS 校に比べて CS 校の教員の方が、自校の児童・生徒に対する肯定的な評価が高い割合となっております。このように児童・生徒自身の調査結果から得られた傾向と、また教員を対象とする調査結果から得られたものは整合性がある、という傾向があるといっているのではないかと思います。

次に、CS 導入は児童・生徒の地域活動や、大人とのコミュニケーションとも関連するかというところを、CS 導入の有無と教員の観点からみた児童・生徒が「地域活動に積極的に参加している状態」に対する回答でございますが、こちらにつきましても CS 校の先生の方が「そう思う」「ややそう思う」という肯定的な回答が非 CS 校に比べて高いという結果が出ております。また同様に CS 導入と教員の観点からみた児童・生徒が「地域の大人に挨拶したり、話をしている」状態ということ聞いた結果におきましても、CS 校の先生の方が児童生徒は地域の大人に挨拶をしたり話をしている、コミュニケーションをよくとっているということ捉えているという結果でございます。このように子どもたちが確実に CS を導入することで変化してきているのではないと思われる調査結果をご紹介させていただきましたが、そのほかにも様々な面で変化が生じていると思われる結果が出ており、そちらは年度末の報告書の方でまとめることになっておりますので、是非そちらもご覧いただきたいと思っております。

また、地域との連携が効果的に進められている中で、教員自身に変化してきているということについて、教員の職務上の意識に関するものを20項目取り上げまして、分析を行いました。『CS の導入は教員の学校・家庭・地域の連携に対する意識や職務上のやりがい感・同僚肯定感と関連する』と書かせていただきましたが、因子分析しますと4つの因子に分けられました。「やりがい感因子」また「同僚肯定感因子」そして「マンネリ感因子」そして「仕事負担感因子」と、2つのプラスの面とマイナスの面と4つの因子が浮かび上がってきたわけですが、その中で CS 導入の有無と家庭や地域との連携は学校運営や学級運営に不可欠であるという考えに対するクロス分析の結果です。

これは因子分析の結果ではありませんが、CS 校の教員の方が、「家庭や地域との連携は学校運営・学級経営に不可欠だ」という考え方について「とても感じる」という割合が高いという結果が出ております。また因子分析の結果というものを比較してみますと、これまでに全国小学校教員調査というものを行っておりますけれども、この第1因子「職務上のやりがい感」の得点につ

きましては、全国小学校教員調査よりも杉並区の先生方は全体的に高いという結果が出ております。その中でも、非 CS 校の教員よりも更に CS 校の教員の方が高い、という結果が出ております。

また「今の学校で働けてよかった」あるいは「同僚から色々学べている」といった項目で構成されている第 3 因子（職場の同僚肯定感）につきましても、非 CS 校よりも CS 校の先生方の方が高いという結果が出てまいりました。

次に CS を導入したことによって先生に対する学校内外の「ソーシャルサポート」、支援する動きが、実質的な支援や情緒的な支援というものを含めて増えていくのではないかと、それが増えることによって先生方のストレス軽減、あるいは仕事のやりがい感に関連してくるのではないかとことを考え、分析したものであります。ここでは杉並区で取り上げた項目をソーシャルサポートという観点で分類してみました。手段的サポートというのは、実際に具体的な支援をするという事に関連するものであります。その手段的サポートは、保護者によるサポート、地域住民によるサポート、あるいは学校・同僚によるサポートというものがあるだろうと考えます。また情緒的サポートについても、保護者によるサポート、住民によるサポート、学校・同僚によるサポートの 3 種類があるだろうということで、このような項目を抽出し、分析を行っております。

分析を進めたところによると、CS 校と非 CS 校別にソーシャルサポートを受けているという回答が高いか中くらいか低いかに 3 群に分けました。CS 校、非 CS 校ごとの関連を見ましたところ、はっきりと CS 校の先生の方がソーシャルサポートを得ている割合が高いという関連になっております。また CS 導入の有無と導入年数との関連をみましても、非 CS 校よりも 5 年未満の先生方、また 5 年以上の先生の方がサポート高群に入る割合が高いという結果でございます。CS が導入され、また、年数が長くなるにつれて先生方自身も、学校、地域、保護者の方々から具体的な支援、情緒的な支援など様々な支援を得ているのではないかと、ということを示す結果であると思えます。

さらに抑うつということにつきましてもデータを取らせていただきました。これは自己評価式抑うつ性尺度というものでございます。精神的なストレスをもって学校を退職する先生方、あるいは退職する先生方は全国的に見て右肩上がり、減る傾向は見られないわけですが、こういった CS という、学校・家庭・地域の連携による学校運営が進められていることで、先生方自身も様々なサポートを得るなかでストレスも減ってほしいな、というその実態を調べたいということで調査したものでございます。きれいな分布と言いますか、末広型な分布が見られた、という風に考えております。「抑うつなし」という回答が 45%強、「軽度抑うつ」が約 39%、「中度抑うつ」が 15%ほどになっております。

過去に国立教育政策研究所の岩崎先生の全国小学校教員調査におきましても抑うつ系尺度のデータを取らせていただいております。全国小学校教員調査と杉並区のデータを比べますと、特に杉並区が高い、低い、といった関連はないという風に思われました。杉並区の先生方が全国平均に近いという風に思えます。先程、サポート高群は CS の導入年数が長い学校、あるいは CS 校であることを示しましたが、抑うつとの関連を見ましたところ、当然の結果、先生方全体においてもサポート低群、中群、高群にしたがって抑うつなしの回答が高まるというふう

に見られます。このように見てまいりますと、CS の導入は子供たちのためにももちろん素晴らしい取り組みであるということとともに、学校あるいは先生方にとっても素晴らしい、意味のある取り組みなのではないかという風に思います。

【地域住民・保護者対象調査について】

続きまして、地域住民・保護者の方々を対象としました調査結果の一部をご紹介します。CS 校の住民や保護者は、学校が保護者の力を積極的に活用していると感じる、という結果ですが、学校は学校運営に保護者の力を積極的に活用しているということについて地域住民・保護者はどのように評価されているかということ調べさせていただいたものであります。こちらは小学校の場合、中学校の場合、非 CS 校よりも CS 5 年未満、また 5 年以上と年数が上がるに従って、学校は学校運営に保護者の力を積極的に活用しているという割合が高くなってまいります。保護者の方々もそのような理解が続いてきており、また実際に学校も積極的に活用するように変化してきている、という風に思われるデータでございます。

このほか、その CS 校に住民や保護者の方々は学校支援をしているか、具体的な支援をしているか、というデータを取らせていただきました。その関連を見ましたところ、統計的に有意差が表れた結果がいくつか見えてまいりました。授業の補助経験の割合を見ますと、CS 校の地域住民・保護者の方が非 CS 校に比べて高い、となっております。また図書室などの管理、運営の経験につきましては、やはり 5 年以上の CS 校の方が、5 年未満の CS 校に比べて高い。一方、運動場や体育館の管理ということにつきましては 5 年以上の CS 校よりも 5 年未満の CS 校の方が多い、というような関連が出てまいりました。この解釈もいろいろな解釈が可能であろうと思えますけれども、運動場の整備あるいは体育館の整備というものに関わっていただき、徐々に信頼関係が構築されていく中で、実際の授業の補助に入っていただく、あるいは図書室の管理・運営もお任せするというような形に変化してきているということがこのデータに表れたのではないかという風に思われます。

【学校運営協議会委員対象調査について】

最後に、学校運営協議会委員対象の調査についてです。学校運営協議会委員になる方々に、委員になる以前の学校や地域の変化についてお尋ねしました。

「学校の運営に保護者や地域の声が反映されるようになった」、また「保護者や地域が学校運営に協力的になった」、「授業や行事が改善され充実された」、「児童・生徒が地域活動に積極的に参加するようになった」、「地域団体同士の連携がすすんできた」というそれぞれの項目について、そう思う、ややそう思うという肯定的な回答が、そう思わないという否定的な回答に比べて圧倒的に多いという調査結果が出ました。このように学校運営協議会委員の方々の観点から見ても、学校や地域が CS を導入することで変化してきたのではないかということを実感されていることが浮かび上がってきております。

今回発表したものは調査結果の一部ではございますけれども、CS 導入 10 年を経まして、児童・生徒、学校、教員、保護者、地域住民それぞれに様々な変化が生じているということが確認できました。またその変化には CS 導入のプラスの成果・効果と考えられるものも多く見出されています。今後の更なる発展・改善に向けまして、この調査は基礎的な重要な資料になるものと思われましても、言うまでもなく、児童・生徒、学校、教員、保護者、地域住民の変化というものは 1 回限りの調査で分かるものではございません。5 年、10 年、20 年、30 年先にどうなっていくかという長いスパンで追いかけていくことで初めて本当に CS というものの意味、意義が明らかになってくるのではないかと思います。

シンポジウム「地域と共にある学校—対話と協働と創造の教育を目指して—」

進行：生重 幸恵

登壇者：金藤 ふゆ子

長 俊介

谷原 博子

小原 潤

【生重幸恵（以下、生重）】

それではパネリストの皆様方からそれぞれ取り組まれていること、自慢したいことを含めて自己紹介をお願いいたします。それでは長さんをお願いいたします。

【長 俊介（以下、長）】



富士見丘中学校の学校運営協議会の会長をさせていただいている長 俊介と言います。まず富士見丘中学校との初めての出会いですが、実は10年ほど前、学校に対して苦情を言いに行ったのが始まりです。不登校で自分が関わっていた子どもが、学校側の対応でさらにひどい状態になってしまったので、そのことについて学校側に相談をしに行くという形で学校に伺いました。校長先生と面談をさせていただき、結果的にはその話し合いの後、学校からの働きかけが改善されたのですが、学校に行ったその日の晩に校長先生から電話がかかってきました。これから学校評議員制度というのが始まる、と。その制度に一役かってくれないか、と。私はそれまで学校とは対局にいたわけですから、そんな人間が学校の中に入って大丈夫ですか？と校長先生に尋ねると、その先生曰く「これからは、学校とは違う立場の意見も聞かないと、やってはいけないと思う。だからそういう立場で参加して欲しい。」とのことでした。自分も異論はないので参加させていただき、それから13年になります。先程、杉並は先駆的だと言うお話がありました、その点では確かに私自身、いろいろな地域でいろいろな活動をさせていただいていたのですが、学校側に誘われたのはその時が初めてでしたし、13年前に入った時の評議員メンバーも画期的なメンバーでした。後に最高裁判所の判事をされた弁護士や、杉並区内にある通信機器会社の社長、新聞社の編集局長、もちろん地域の代表で、町会の会長や商店街の会長等々、そういった方々が学校のことについて、生徒のことについて、献身的に話し合いを行っていたのです。そのころから斬新なことを行っているな、と思っていました。さて、私の学校で自慢できることというのは、10年以上続けている独自の「意識調査」です。保護者の方と生徒、教員に対しての「意識調査」を杉並区が始める前から行っています。今年で11回目の「意識調査」です。その方法も、生徒にアンケートをとる場合は学校運営協議会委員（以下、CS委員とする。）が直接クラスに行き、CS委員がアンケートを配って回収をする。先生方はノータッチです。それを集計して報告するところまで、すべてCS委員だけで行っています。その積み重ねが11年分あるということは、ものすごい資源であると思っています。以上です。

【谷原博子（以下、谷原）】

私は地域運営学校（以下、CSとする。）指定の翌年から、当時は学校教育コーディネーターという名称でスタートしまして、いわゆる事業の企画のサポートをする関わりから、学校のいろんなことに関わってまいりました。PTAの経験もほとんどなく、どちらかといえば子どもは学校にお任せというような保護者のほうで、学校への理解もたぶん乏しいほうと分類されるような感じでした。CS委員としては2年目ですが、学校教育コーディネーターの時から桃井第四小学校の学校運営協議会というのは、非常に多くの地域の人たちと



討議を重ねるといふスタイルでしたので、そのときから出席をさせていただいておりました。今年、CS指定の10年にあたりまして、データの収集、そして検証、「桃四（MOMO4）10年」という形のリーフレットの作成にも携わっております。自分もこの10年を振り返ってみるのいい機会かな、と思ひまして参加させていただきました。そういった中でお願いしたいことがあるんですけども、この10年で校長が2名、副校長が4名、CS委員が19名替わりました。そのなかでどういった風にこの学校運営協議会がエンジンを止めずに動いてきたかということ、皆さんと議論できたらな、と思っています。以上です。

【生重】

やはり10年を超すと19名ものCS委員の交代がある、この辺りは課題になっている部分ですので、あとでご発言いただけたら、と思います。

【小原潤（以下、小原）】



CS10年ということですが、私は10年前、区立高井戸東小学校で担任をしておりました。まさにこの10年で杉並区の教育も大きく変わってまいりましたが、その渦の真っ只中に自分自身もいたんだな、というふうに感じています。高井戸東小学校では、新たに「コーディネーター」という立場の方が学校に入られたり、学校支援本部ができる、土曜日学校が始まる、といったことがありました。

次に行ったのが大宮小学校でした。大宮小学校では副校長としてでしたので、地域と学校をつなぐ要の役として直接関わらせていただきました。

ほぼゼロからのスタートでしたので、学校支援本部の部屋に支援本部の皆さんと何時間も籠って色んなことを話したのを今でも覚えております。

現在は、方南小学校の校長でございます。初めに方南小学校の学校運営協議会について、二つだけ自慢させてください。

まず一つ目が「共有・共創プロジェクト」ということをやっています。今いる方南の子どもたちに向けてオーダーメイドの教育を進めていこうじゃないか、そのために学校とCS委員の皆さんで共同でその中身を作っていきます。まずは現状の分析、それをもとにしてどんな学校を創っていこうか、ということ色々考えました。その中で更に絞って行って、共有ビジョンを作

っていきました。1年かけてやってきたというところでございます。

二つ目の自慢が、「ほうなん井戸端会議」です。保護者、地域、学校、そしてCS委員も入った懇談会です。懇談会は杉並区の他の学校もやっていますけれど、うちの学校は年3回やっています。今度の1月の会は100人集めて、体育館でやろうと考えています。色々得るものがたくさんあります。その辺りも後でお話ししたいと思います。

【生重】

最初のテーマであります、金藤先生の調査結果報告を受けて、データの部分でパネリストの皆さん方から聞きたいこと、それと共に、今奇しくも自己紹介でデータに表れていない自慢というのがお三方から出ていたかな、と思うんです。パネリストの皆様方から、どのような取り組みがどのような数値に結びついているのか、をそれぞれご意見がおありでしたらいただきたいのですが。

【長】

金藤先生のデータからは少し離れてしまうかもしれないのですが、学校運営協議会というもの、そういうシステムを作ったということは良かったかなと思います。私はもともと子どもの支援でずっと学校に入っています。いろいろな場面で入りました。いじめの場面ですとか、学級崩壊している場面ですとか、そうした問題が、表に出てきてしまってから学校に入る。そういったときいつも感じていたのが、学校の閉鎖性です。そのことをすごく感じていたのですね。実際、表に出るころには大変なことになっていて、その段階で私が入っていろいろサポートしようと思っても結構難しい状態だったりする。なんでこんなになるまで、と。もちろん学校側は放っておいたわけではないのですね、一生懸命学校の中で努力はしているのだけれど、学校の中だけで解決しようとしていた。もうちょっと外に協力を求めたら良かろうに、とずいぶん思った時代があったのです。

それが学校評議員となり、自分が実際に学校の中に入って、中にいる立場から学校を見ると、外から介入してきた自分では、今までわからなかった違ったものが見えてきました。もっと早く知っていれば協力の仕方も工夫ができたのにも思いました。今、学校評議員会や学校運営協議会が運営されて一番大きいことは、学校が否応なくオープンになってしまうということです。学校に第三者が入るということで隠し事はほとんどできません。初めから隠し事はできないと思っているので、校長先生を含め、学校側はすべてオープンにしてくれます。ですから、何か困難なことが起こった時なども初期対応が早いわけです。であれば、私たちを含め協力できる人たちが協力できる。結果的には子どもたちの利益になっている。と私は思います。

【生重】

同感です。チーム力が増しますし、子どもは地域のもので、家庭があって家庭が集まって地域が形成されるということにおいて、様々な子どもたちに対してメリットが生まれているという事実はあるのかなと思います。

【谷原】

私が注目していたのが、学校運営協議会が学校支援に参加しているというところなんです、

体育館や運動場の整備の割合が実をいうと地域運営学校の指定が5年以上の方が低くて、2番の方が高くなっている、これはたぶん支援の質の在り方が変容していると思うんですけども、まさにその通りで、先程少し触れましたが、学校運営協議会も10年も過ぎると19名が経験をし、教員と言えば桃四の場合は30数名という風になっているんですが、10年経つと先生で10年前からいる先生って実はほとんどいないんですね。30人中3名の先生が当時のことを知っているというだけで、あとは教員、先生たちはほとんど入れ替わっています。1番最初、学校運営協議会があって6年生のとき学校運営協議会ができたよ、という子が現在21歳になっています。そして入学した時から地域運営学校と、6年間丸々地域運営学校で育った子どもたちが今高校1年生になっています。で、何が起きているかという、上手く卒業生が帰ってくる場を作り、システムを作っていくと丸々地域運営学校で6年間過ごした子どもたちが卒業生ボランティアとして母校に帰ってくるようになりました。

ボランティアで関わる人もずいぶんと変わってきたなという風に考えています。何が違うのかな、と思って分析してみたんですが、たぶん6年間のうちに自分の保護者、お父さん、お母さんが学校でボランティアをする姿を見ていた子どもたちが自分たちも学校にボランティアとして帰ってくる、非常にベースができたのかな、という風に数字には出てないんですけども、私も同じようなことを感じました。

【生重】

素晴らしい事例ですよ。

【小原】

このデータを見せていただいて、教員の抑うつ性尺度というのが、うちの教員はどうなのかな、と非常に気になりました。私も30年教員をしていますが、すっかり教員文化が身につけております。そんな中で、教員文化は自己完結型で閉鎖的であり、初めてやることに対して抵抗を感じる文化が根付いているわけです。そんな中で、先程申し上げた井戸端会議についても、面倒くさいな、保護者や地域の方たちと時間を過ごすのが大変だな、と思ってしまうところもあると思います。しかし、全体的に見ると私たち教員にとっても絶対自分たちのためになるんだよ、ということを繰り返し伝えているところでもあります。

一方、保護者の方たちに話しているのは次のようなことです。今まで学校との関係は、自分の子どもを通してだけの関係であり、その子が良かったですね、または悪かったですね、という話を中心でした。でもこれからはそうではなくて、もっと街の子どもたちと一緒に育てる関係ということ意識していくといいのではないかという話をしています。

パイプが狭いと一旦何か起こった場合に色々厄介なことになります。でもパイプが複数あると解決の仕方も全然変わってくるわけです。方南小学校はまだ地域運営学校2年目ですが、これからもどんどん進んでいってくれるといいなと考えています。

【生重】

奇しくも谷原さんからボランティアのレベルが上がっている、質が上がっている。要するに学校の周辺の整備と、花植えて木だけ切っていてくれればいいのかよ、というところからもっと本丸

に食い込めるという話がありました。いろんな大人が入ってくることを教員が抵抗を感じていたことを私も知っていて、先生たちからも意見を聞いていたのですが、今になってみたらこういう結果になったんだと思います。

【金藤ふゆ子（以下、金藤）】



この度の調査結果をご覧になって頂き、実践に携わる登壇者の皆様から調査結果を「理解できる」と仰って頂いたことが、とにかく嬉しいですね。それは本調査で捉えようとしたデータがきちんと捉えられていたということの意味すること、即ち、調査の妥当性の検証ができたことを意味していると思うからです。

また谷原さんの方から、CSの導入によって、卒業生が母校にボランティアとして帰ってきたといったお話をうかがうことは本当に素晴らしいですね。今後、そうした実態も、調査等で確認させて頂きたいと思った次第です。

【生重】

みんなこういったことをきちんと取り組みながら、このコミュニティ・スクール、地域運営をそれぞれの委員の人たちが各校で育ててらっしゃると思います。ではここで、そうはいつでも課題がある、私もいつも考えるんですが、任期があって委員がいて、作り上げてきた人と次を受け渡されていく人たちの理解の差みたいなものを含めて、まず谷原さんからCS委員が19名も変わったときに、その意識の伝達というか、これだけレベルの高いことをやっているもので、どうやって受け継いだ、どうしてバトンを渡していったのか、なにかおありでしたらご発言いただきたいのですが。

【谷原】

これは10年の検証の時に、10年の間に5年ごとに校長が2名変わりました。その時に関わる方もそうですし、教員の方にはどんなことをメッセージとして送ったのか、というインタビューをした時には、「継承」と「発展」がキーワードである、と言いました。校長が変わるとガラッと方針が変わると地域の方も困惑してしまうことがありますが、これまでやってきたことを継承し、発展させることが大切だ、ということです。いわば強い校長のリーダーシップがあったからなのかな、と思っております。

【生重】

校長のリーダーシップが大事であり、また「継承」と「発展」という視点が大切である、ということですね。委員の方が交代する時に、ずっと繋げてきたCS委員の意識みたいなものも校長のリーダーシップの範疇に入るというわけですか？

【谷原】

そうですね。10年という歴史を計算すると、12か月、毎月学校運営協議会を開いて、2時

間なので240時間くらい地域と学校と色んな教育の語り場として学校運営協議会が存在すると、それだけ議論を重ねてきた中で、自然と委員の任用に関しては、こういう任務をやってくれる人になってほしいよね。

ある意味学校と教員、地域との共有の忍耐覚悟、方向性ができてきたのもよかったのかな、という風に感じています。

【生重】

まさに、そこが聞きたかったところです。

【長】

年1回学校運営協議会委員の各校代表者会議が行われます。そこでよく言われることは、生重さんや谷原さんが言うように、メンバーが替わっていくときの次の人材がなかなか見つからない、メンバーが替わった時に中身がガラッと変わってしまうのではないかとかですね。それに対していろいろな意見が出されます。協議会が設置されてもう10年になる学校もあれば、まだ2、3年目の学校もある、そんな中で出てきた意見は、「ずっと行ってきた運営協議会の中で人材は育っている。」「メンバーが替わったとしても、結果として大切なものは引き継がれている。」等です。例えばある学校では、物凄くアグレッシブな会長さんがいて、そのあとに会長さんになられた方が、「僕は最初どうしようか、と思った」と。前の方が物凄くアグレッシブな方だったので、「僕は不安で不安でたまらなかった」と。ただ動き出してみると、今まで行ってきたことというのは自然と継承されるわけです。1人の強力なリーダーシップで行っているように見えたものも、実はみんなの力があって成り立っているわけです。学校の教職員や学校運営協議会のメンバーも含め、やはり皆さんの力で行われていたわけです。だから1人トップがいなくなっても結果として継承している事実があるのです。それでほっとされた、ということがありました。また人材についても、「育っていないように思えても育っている。」と、さらに言えば、今在校している子どもたちが、先ほどどなたかがおっしゃったように、将来委員に入ってくるかもしれない。という繋がりもあるのかな？と思っています。

【生重】

年3回やっているほうなん井戸端会議の自慢をお聞きしたいのですが、これはいい方法だと思うんですね。意識を上げる、理解を促す、委員の次のメンバーと地域、保護者にこの制度を理解してもらおうということ、支援本部の在りようとかCSの在りよう両方を総括した形で、杉並区の特徴ある取り組みが動いているということ、それもそれぞれ学校ごとに個性があって、それぞれの特色が打ち出されているんだということ、これを理解していただくためには、まさしくこれだと思うので、その辺のお話をお願いします。



【小原】

継承と発展ということでお話しますと、異動のある校長よりもCS委員、地域の方々の方が

学校と関わる期間がよっぽど長いと思いますので、その方が影響が大きいのではないかと思います。やはり地域の雰囲気がすごく大きいと思います。それは私も異動などで色々な学校を回中で感じるところであります。

そのなかで、懇談会のお話をさせていただきます。先程もお話がありましたように、色々な学校でこの取り組みが始まっています。

方南小学校でも、参加された皆さんから「話してよかったね」と言っています。感想を聞くと、担任の先生だけでなく色々な先生たちと話せてよかった、ということや、教員からは、話すことで意識が広がったとか、色々な人たちの話が聞けて思考が活性化した、という感想が聞かれました。やはり地域の人たちも同じ子どもたちを見ていて、同じことを考えているんだとか、一緒に考えてくれているんだなと思った、という声もありました。

逆に保護者の方から、先生や学校ってこんなことまで考えてくれているんだ、というような感想が出たり、教員からも、地域の方ってこんなに熱いんだな、などと、懇談会を通じてお互いにリスペクトできるような関係ができたな、というふうに思っています。

【生重】

100人という人数なんですが、これはCS委員、PTA以外にも地域のどのような方たちに、どこまで声をかけてやってらっしゃるんですか。

【小原】

結構風呂敷を広げて100人という数字を出しているんです。いつもは40人くらいです。

今回100人を集めるために色々なところに声をかけています。やはり一つは保護者です。児童数470人のうち50人くらいは集まってほしいと考えています。それと教職員が25名。それと地域の方々に、中学校の関係でもビラを配ってもらったり、町会の方々にもチラシを配ったり、図書館、児童館、青少年委員の方々や同窓会の方々など、幅広く街の子どもたちに関わったり、影響していただいている方々に、どうぞいらしてください、という案内を積極的にしています。

【生重】

商店街とかも巻き込んで？

【小原】

そうですね。商店街、町会関係も巻き込みたいと思っています。

【生重】

今のところ、100人を目指す会、なんですね。

【小原】

そうです。

【生重】

でも素敵だと思いますよね。地域100人集まって熟議ができたらとても素敵です。もっと効果高める方法とか。

【金藤】

熟議も素晴らしい取り組みですね。

昨日、宮城県の方に行ってまいりまして、一つそちらの取り組みをご紹介します。宮城県を訪問したのは、そちらの放課後支援や学校支援地域本部の活動について実態をヒアリングするために参りました。そのなかでとても大事な、と思った取り組みがあります。宮城県では、放課後支援や学校支援地域本部に関する情報をミニコミ誌のようなパンフレットとして作成し、配布をしていました。その冊子の表紙には子どもたちの写真なども掲載しています。子どもたちは自分たちの写っている冊子を大事に持って帰り、家に飾っているとお聴きしました。また保護者の方々も、内容をとてもよく見てくださるそうです。また、冊子の中では学校の先生方をターゲットにした情報もあるんです。例えば、先生は赤ペンに非常にこだわっている、と。どんな赤ペンが書きやすいか、といったそんな情報も含めながら、先生方も見てくださる工夫が凝らされた情報誌を作り配布されていて、それは非常に良い取り組みだなと思いました。

先程のお話にも出ていました継承と発展という観点で見ますと、井戸端会議等の熟議にいらっしゃる方々はかなり放課後支援や学校支援地域本部に関心の高い方だと思われます。そうした機会に、出かけてこない保護者や地域の方々、さらには学校の先生方にも、新しい取り組みをいかに理解して頂くか、またその活動を新たなメンバーを加えていけるかを検討することが重要で、そのために有効な1つの方法ではないかと思いました。

【生重】

それは相当いいと思います。なんでいいかという、今回のテーマに1つも入っていないんですが、これから自立してずっと続けていくためには、それぞれの学校エリアがコミュニティ・ファンディングを考えていかななくてはならないんですね。その時に町会、商店街が本当にみんなを持ち寄ってちょっとずつの資金を出し合うことで、商店街のホットニュースとか、町会のホットニュースとか、そういうのを含めて学校とのつながり感を、今のミニコミ誌のような形でできると、出しやすくなるんじゃないかと。

【長】

実は今年中学校で周年行事を行いました。周年行事は寄付とかを集めます。そこで要になるのが、町会、商店街だったりするのです。確かにこれから自分たちのお金みたいなものを作って、学校での行事に使う時がくるかもしれないですね。

文科省の開催するCS（学校運営協議会）の会議があったので、そこに参加して話してきましたのですが、CSも指定されていない地域がいっぱいあります。どうして手を上げないのか？役割のなかに、人事に対して意見を言うことができる、ということが入っているので、そのことばかりがクローズアップされ、学校側が自分の懐に手を入れられるのは嫌だな、と思っているところが多い。また、委員の人材がなかなか集まらないし育たない、といったところもあるということ

した。でも実際は、始めてみるとそれほど教員人事のことについて話はしないです。ましてやこの先生は本校に合わないので異動してもらおうなんて気安く話す訳がありません。学校評議員の時に学校運営協議会にならないかと、1度打診があったのですが、断りました。やはり責任が持てないですから。それこそ、そのころ3か月に1回くらいしか会議を開いていないのですから、それでどうやって学校の方針や人事についてまで意見が言えるのか。そんな責任なんて持てません。と断りました。でもその2年後には、覚悟を決めてCSになりました。始めてみると、教職員とCS委員、学校と地域の方々が一緒に協働することによって得るものがいっぱいありました。学校も地域と悩みを共有し、地域も学校に対して責任を持つって大切なことじゃないですか。これもよく言われていることなのですが、震災が起こると学校は災害避難拠点になります。その時にCSの場合は、立ち上がりがとても早いと言われています。地域と学校が普段から頻繁に顔を合わせ、お互いがマンツーマンで分かっているの、誰に何を頼めば良いかがすぐ把握できると。でもそういったものがないところは、一から立ち上げなくてははいけない。コミュニティができているところであればすぐに拠点、災害避難拠点になりうるわけです。そういった意味でもCSっていいと思うのですが。

【生重】

まさしくその通りだと思います。会場の皆さんに、うちは委員の交代で困っているよということも含めて、自慢などお聞かせ願いたいのですが。

【会場】

区内小学校でCSの教員です。谷原さんは、私5年目なんですけど、来た当初から学校にずっといらっしゃって、何か困ったことがあると「谷原さん」ってお声をお掛けすると、当時は総合のこととかメインだったんですが、いろんな手配をしてくださる、最初はそんな繋がりでした。本校は月に1回学校運営協議会がありまして、木曜の6時からという設定



になっています。教員の本心からすると、勤務時間外ですし、いろんなこともあるのでなかなか参加するのが腰の重い方も多いかと思うんですが、各学年1名は必ず出てきて、子どもたちの様子、それも良いことばかりではなくて、まだこういったことが課題なんです、ということも話し合われます。そうすると、学校運営協議会の委員の方々がこれはこういったことで考えられるんじゃないかとか、こういうことをやっていったらもっと良くなるんじゃないか、というような話を伺うこともできます。自慢なんですけれども、桃四祭りという名称はただのお祭りなんですけど、校庭いっぱいには櫓が建ちまして、これは地元の地域の方たちに建てていただいて、まあお店も出るんですけど、PRも含め商店街の方も出てくださいますし、地域の同じ高校の工業高校ですとか、農芸高校ですとか、それから今年は作業所の皆さんにもお店を出していただきまして、そういったことでやってまいりました。それですごくいいな、と思ったことは、入口のところでチケットをもぎってくださっていたのが、地域とは遠いところにあります会社の社長さんであります。それから隣にあります八幡幼稚園の園長であります。2人は学校運営協議会委員の方で屋

根の下でもぎりをしてくださって、子どもたちに直接お話をしてくださる、そんな光景が普通にありますので、本当にCSに来てよかったな、と思っております。

【生重】

ありがとうございます。分け隔てなく地域が子どもたちに関わる環境が具体的に伝わってまいりますね。

【谷原】

とても幸せに感じております。

【会場】



区内小学校のCS委員です。先程からありました、継承と発展という点で、先ほど谷原さんからのご発言で、10年間で校長先生が2名替わられたということなのですが、当校は6年間で4名校長先生が替わられまして、新しい校長先生が吹き込んでくださる風をいかに学校と地域の方に反映させていくかという間に学校運営協議会があるな、という感じる6

年間でした。『学校支援本部ってなんだろう新聞』に載っている取組紹介をさせていただきたいのですが、夏休みの算数教室に去年から爆発的にボランティアが必要だということで、校長先生から学校運営協議会委員の方にご相談がありました。

協議会の中の有識者の先生のご紹介で、何名かの大学生のボランティアをご紹介いただき、委員の方で集める形で去年やったんですけども、今年校長先生替わられて、少し算数教室の形を変えたい、と。今度は地域の方にも教えてほしい。去年は地域の方は丸付けだけでいいです。教えることがあれば、大学生がいるので大丈夫です。という形で進めていたんですけど、今年はできればマンツーマンで付くくらい皆さんに教えてもらいたい、という風に言われたときにボランティアを集めるノウハウを身につけました。去年は学校運営協議会も関わってやったんですけど、今年は支援本部の方で集めるときに、卒業生、高校生に声をかけてみたらどうだ、と。そうすると、地域のおじちゃんおばちゃんよりは、子どもたちに近いので、大学生でなくても卒業生のボランティア集めたらどうかという声が上がって、高校生にも算数教室のお手伝いに来てもらいました。先程谷原さんがおっしゃったみたいに、その子どもたちは、うちもCSの指定から6年、支援本部ができて7年なので、ボランティアに大人が入ってくることに慣れた子どもたち、それを見て育った子どもたちが今、高校生になっておりますので、その子たちが「こういうことがあるので来てほしいんだけど」と言ったら、ちゃんとそれにきちんと応えて入ってくれたので、継承して発展した事例ができたかな、という風に思っております。

【生重】

ありがとうございます。まさに、継承と発展ですね。今回この総合タイトルとして杉並が「対話と協働と創造の教育を目指して」という、まさしく私たちがやっていることの方角性はこちら

を目指している。そこに発展と継承という問題でキーワードが出まして、今それぞれが抱えている課題を解決できるのではないか。井戸端会議に準じてワールドカフェ、それぞれの学校で様々な取り組みがあるかと思うんですが、それがまさしく先ほど会場からご発言いただいた2名の方の学校で行っていると言ってくくださった、継承と発展に繋がるのかな、と思っています。このキーワードについても是非分析していただきたいんですが。金藤先生いかがですか。

【金藤】

是非そうした分析をやらさせていただきたいと思います。杉並区のCSの成果検証調査のデータを見せていただいて、とにかくいい結果が出ていると思います。実は、文教大学の大学院生もこの度の調査データの分析に関わらせて頂いておりまして、過日、学内で研究発表を行いました。その場で、他のご専門分野の、「CS導入のマイナス効果はないのか」とのご質問を頂いております。しかし、改めて調査結果を見ましてもマイナス効果は特に見出せていません。ですからCSを導入し、学校、家庭、地域の連携による教育を推進する取り組みは、CSが学校、家庭、地域の連携の核になるという役割を果たしながら、児童生徒への効果、保護者や地域住民への効果、学校や教員への効果も期待できる取り組みであり、最終的には地域を活性化するとか、街づくりに寄与するプラスの効果があると感じています。

【生重】

本日のまとめとして、小原先生からご発言も含めてまとめていただけると嬉しいな、と思います。

【小原】

方南小学校でも、地域の方々が直接子どもに関わるということが本当に様々な場面であります。放課後子ども教室をやったり、書道教室や算数のサポートなどをしてしています。

子どもたちに、地域の方々がこんなことをやってくれているんだということをしっかり伝えなくてはいけない、ということが私自身の校長としての大きな課題かな、というふうに思っています。

「この地域は子どもたちをすごく大切にしている地域なんだよ。その方たちは素晴らしく良いお手本だよ」ということを子どもたちに伝えて、次の世代を作っていくことが大きな課題である、と思っています。

【谷原】

今、杉並を見渡してみますと、恵まれているな、と感じることの方が多いですが、被災地の話も出ましたが、この先いつ、この地域が災害救助を含めて試される時期っていうのが頭の片隅にあります。そんなときこそ「この地域でよかったな」と思えるかどうかなんじゃないかと思っています。その際に被災地を見てもそうですが、学校というのはやはり希望です。その希望の学校を地域の交差点的に、コントロールしながら、「点」ではなくて「面」でマネジメントできる機能が、実はCSにあるんじゃないかな、と思っています。

私なんかは、子どものことは学校に任せたというような落第な親だったんですが、このCSの

エンジンを止めることなく続けていくことで、この子どもたちの未来はこの地域に任せた、と言ってもらえるような学校運営協議会になったらいいな、と思っています。

【長】

C Sになると、みんな「うちの学校」って言うのです。別に自分の子どもが在籍しているわけでもないのに「うちの学校」と。やっぱりそれっていいですよ。みんなが自分の学校って思うって。それが原点かなって思うのです。でもコミュニティ・スクールになると、委員の人たちが肩ひじ張って「何かやらなきゃいけない」、「何か大きいことをやらなきゃいけないって」思うところがある。それもC Sを躊躇する理由の1つにあるのです。でもそんな必要はないと思います。それぞれの地域にはそこにしかない特徴があると思います。富士見丘中学校の地域であれば、浴風園という老人保健施設があります。そことの交流を学校としては何十年と行っている事実があります。施設で音楽会を開催していただいて、そこに吹奏楽部が参加するとか、花壇を作ったりなどのボランティアを含め様々な交流があります。もうそれは、長い間続けて行っていること。それをどんどん広げていけばいいわけです。無理にアドバルーンを上げる必要はなくて、その地域にあったC Sの在り方ってあると思うのです。明日杉並区の広報が出るみたいなので、もしよろしければ学校運営協議会委員の募集についての記事をご覧ください。私は、子どもの味方になれる大人をいっぱい作りたと思って33年ずっと活動してきました。だからその片棒を皆さまにもぜひ担いでいただきたいな、と思っています。

【金藤】

継承と発展ということは、もう既に杉並区の取り組みの中に色々出てきていると思います。それは杉並区にとってのみではなく、他の地域にとっても非常に大きな課題です。是非、杉並区の地域と共にある学校や、その「継承と発展」について、他の地域のモデルとなるような事例を沢山示していただけたらと思います。更なる発展を期待しております。

【生重】

本日は短い時間でしたが、かなり確信に迫ったキーワードが出たなと思います。特に私の印象に残りましたのは、やはり校長先生のリーダーシップ。経営ビジョン。子育てをしていく学校教育の中での、地域を巻き込む経営ビジョン。そこにどの校長先生がおいでになっても、そこを受け継ぎ、そして協力していくんだという体制がある。そして、この校長のリーダーシップ。それから、街の子どもは街で育てるんだ。という言葉がとても印象に残りました。みんなの力で、そしてコミュニティ・スクールとしてあってよかった、そこを永久に続けていくためには継承と発展が必要なんだ、ということがパネリストの皆さんや会場からのご協力で導き出されたような時間でした。



記念講演「江戸の教育システムに学ぶ」

東京学芸大学教授 大石 学

《目次》

はじめに

I 江戸イメージの転換

II 「平和」の到来と文字社会 ー江戸前期ー

III 8代将軍吉宗の教育改革 ー江戸中期ー

IV 国民教育の発達と普及 ー江戸後期ー

おわりに

はじめに

江戸時代は、これまで、武士が威張り、農民が抑圧・詐取され、貧困に苦しむ、というイメージで語られてきました。しかし、近年、江戸イメージが変わってきました。それは、100年に及ぶ戦国時代を克服して達成した265年の「平和」「泰平」の時代というイメージです。江戸時代は、265年間、国内で戦争がなく、外国とも戦争をしない、世界でも稀な時代でした。この平和を支えたのは、暴力や武力ではなく、教化、教育でした。これは、私たちの今日の「平和」と教育を考える、重要な視点になると思います。

最近、ノーベル賞を受賞したパキスタン出身のマララ・ユスフザイさんが、紛争地において戦争をやめるために、ぜひ教育の普及・発展を、と訴えたことにも、相通ずるものがあります。

また、現在、日本において、世界遺産登録の推進の1つに、江戸の教育遺産を推す動きがあります。先日、大分県日田市で国際シンポジウムを開きました。日田の咸宜園（かんぎえん）、水戸の弘道館（こうどうかん）、栃木の足利学校を、江戸の教育遺産として、先にお話しした江戸の「平和」と結びつけ、世界に訴えるという運動です。

一方で、財務省と文部科学省が、40人学級、35人学級というところで、対立しています。これは、主として財政問題に起因していますが、国家が社会が教育をどう考えるか、という問題にもかかわります。

さて、杉並区は水爆禁止署名運動、平和都市宣言など、平和活動で社会をリードしてきた歴史があります。この杉並区で、過去の教育、今日の教育、未来の教育を考えることは、とても意義深いことだと思います。

I 江戸イメージの転換

1 時代劇の変化からー「チャンバラ」から「現代劇」へー

近年の「江戸イメージの変化」は、社会的には、「チャンバラ離れ」としてもあらわれています。古くからの時代劇の伝統を受け継ぐチャンバラは、正義のヒーローを多くの悪人が取り囲み、順々に

斬りかかるも、皆斬られて全滅するというパターンで、繰り返し演じられてきました。子どもの頃、なぜ一斉に斬りかからないのか、疑問に思っていたのですが、これは歌舞伎とつながる様式美の世界、踊りの世界なのです。そしてヒーロー、正義が必ず勝つという「勧善懲悪（かんぜんちょうあく）」のお約束のストーリーのもと、ドラマが作られていたのです。

しかし、今日の私たちの現実の社会を見ると、原発再稼働、TPP 問題、集団的自衛権など、国論が二分され、どちらが正しいと、なかなか判断できない課題が山積みしています。どちらかが0でどちらかが100ということは、言えません。私たちは、複雑な社会に生きているわけです。しかし、江戸時代も同じで、正義は必ず悪人に勝つ、という社会ではないし、正義の人が悪者を何人斬っても罪に問われない、という社会でもありませんでした。もう少し江戸時代をリアルに見つめたとき、より豊かな江戸時代が見えてくることを、現代人が気づき始めていると思われま

たとえば、1866年に来日したフランス海軍士官のデンマーク人スエンソンは、「帯刀（たいとう）した者たちの間で流血事件が起きたと耳にするのは滅多になく、この国の人間の性来の善良さと礼儀正しさを存分に物語っている」（『江戸幕末滞在記（えどぼくまつたいざいき）』）と、述べています。世界を見てきた外国人が、日本に来た時に、多くの人が刀を差している、でもなぜ使わないのだろう、と不思議がっているのです。たとえば、浮世絵の参勤交代の行列を見ても、槍（やり）の先や鉄砲、あるいは刀などを袋に包んでいます。もちろん雨風をよけるため、ほこりが入らないため、などの理由があるのでしょう。しかし、考え方によっては非常に慎ましいともいえます。武力・武器を持っている人は、ともすると、力で周囲を威圧しがちです。現在の世界でも、戦車やミサイルなどの行進をテレビで見ることがあります。けれども、江戸の武士たちは、武器をひけらかさない、むしろ隠すようにしていたのです。辻斬り（つじぎり）や斬り捨て御免（きりすてごめん）など、私たちが江戸から受けるイメージと、「リアル江戸」とのズレが見えてきます。

では、なぜ刀を差していたか、という新たな疑問が起こってきます。これについて、1861年から3度来日した、プロシア生まれの外交官ルドルフ・リンダウは、「日本という国は、あらゆる文明国の中でも、武器を持つ習慣が最も広まっている国であるのに、その危険な習慣の不都合を出来るかぎり避けるために厳しい規則を採用せざるを得なかった。正当防衛（せいとうぼうえい）以外の場合でなければ、路上で何人も刀をぬけば、決まってこの上なく重い罪に問われるのである。槍の刃先、銃の銃口さえもが丁寧に鞘（さや）に包まれているのは、平和時に、なんなれと武器を人の目にさらすことを禁じている厳しい禁止命令のためなのである。敵国に遠征するときにはしか鞘は外されないのである」（『スイス領事の見た幕末日本』）と、日本人の武器の管理・扱い方を高く評価しています。

また、1775年来日したスウェーデンの植物学者ツェンペリーは、「幕府の役人は同じような2本の刀を携（たずさ）えている。うち1本は本人のもの、もう1本はお役目用の刀と呼ばれ、そちらの方が長いのが常である。両方を同じ側の帯にさすが、互いに少し交差させている。役人が部屋に入って座るときは、通常、お役目刀を脇に置くか前に置く」（『江戸幕府随行記（えどぼくふずいこうき）』）と、記しています。長短の2本の刀のうち、長いものはお役目用、公務用の刀だということです。ですから、他人の家に行ったときは、外すことになっているということです。刀の差し方について、私たちは時代劇などで、くり返し見ているので、当たり前なのですが、江戸時代の日本の記録には、「同じ側に差して、少し交差させる」などの表現は見られません。刀の差し方など、日本人にとって当たり前すぎて、別に書く必要がなかったのです。ですが、外国人にとっては、2本の刀を差すのであれば、左右に1本ずつ差したっていいし、背中に背負ったっていいわけです。やはり観察者だな、と思

います。外国人の記録は、ある意味日本人が見られない部分、外から見える客観的評価になるわけです。組織や集団を外から注意して見る、その観察の大切さというのを知らせてくれるわけです。

では、短い刀は何か。18世紀後半に来日したオランダ人イザーク・ティチングは、「日本人の間では、汚名を蒙（こうむ）り屈辱を受けた場合には、自殺をするのが普通のことである。すべて死よりも恐ろしい不名誉に陥ることを避けるためには、常に自殺のための道具を手許（てもと）に用意しておくことが絶対に必要なことである」（『日本風俗図誌（にっぽんふうぞくずし）』）と、短い刀は自殺用の刀と記しています。ですから、他人の家にも、小刀は必ずなくてもいい、ということになるわけです。これは、相手からすれば、長い刀は公務用の刀、公務を執行する公務員の身分証明であり、短い刀は自殺用なので、2本さしていても別段怖いことはないわけです。

1857年に来日したオランダ海軍カッテンディーケは、日本の警察というのは、力で制圧するよりも未然に防ごうとするとところに特徴がある、と述べています（『長崎海軍伝習所の日々（ながさきかいぐんでんしゅうじょのひび）』）。今日、立てこもり事件や人質事件が起きた場合、日本の警察がとことん説得を重ねる姿を私たちは見ますが、外国で似たような事件があると、いとも簡単に警察や軍隊が突入し、力で決着をつけるシーンを見ます。こうした対応の違いが、江戸時代の警察である武士にも見えており、外国人たちは記録に残しているわけです。

1862年に来日したフランス人モンブランも、長い刀と短い刀の同様の使い方を記しています（『モンブランの日本見聞記（にほんけんぶんき）』）。

1853年にペリーとともに来日したドイツ系アメリカ人のハイネは、「すなわち警察は、刀のほか、把手（とって）の付いた短い棒〔十手（じって）〕を持っている。これで抵抗する犯人が手にする武器を叩き落とすのである。槍その他の武器の先端は鞘に収まっている」（『ハイネ世界周航旅行日本への旅（せかいしゅうこうりょこうにっぽんへのたび）』）と、記しています。『銭形平次』などのドラマで、あんな短い十手で悪者の長脇差（ながわきざし）やドスと闘って大丈夫だろうか、ちょっとずれたら指が切れてしまうのではないかと心配していたのですが、どうもあれは本当らしい。悪者の武器を十手で叩き落としていたわけです。有利な武器を持っていても、江戸の武士たちは決してそれをひけらかしたり、使ったりはしなかったのです。以下、私の著書『江戸の教育力—近代日本の知的基盤—』からの引用ですが、「考えてみると、江戸時代は年中、斬り合いをしていたわけではない。武士が刀を差していたことから、ともすると日常的に斬り合いや切り捨て御免が行われていた時代と考えられがちである。しかし、今日残されている様々な記録や史料を見ても、斬り合いの記事はそう多くない。もし斬り合いなどが起きれば、江戸中の大きなニュースになるほどであった。このようなたとえは不適当かもしれないが、今日拳銃を携帯している警察官が、定年までの在職中に事件に遭遇（そうぐう）して発砲（はっぼう）する回数と、江戸時代の武士が一生のうちに刀を抜いて切り結ぶ回数とは、それほど変わらないかもしれない。江戸時代、殺人事件が起きると、役人が出張し、現場検証や聞き込みを行い、報告書を作成する。指名手配書を公開することもある。犯人が逮捕されると、裁判が行われて刑が確定する。人が一人死ぬというのは、現在と同じくらい重い出来事だったのである。チャンバラだけで江戸時代をイメージすると、実態を見失うことになりかねない」ということになります。

これらをふまえると、時代劇の革新があらためて必要になってきます。リアルな江戸イメージに基づいた庶民の日常生活を描く、あるいは彼らの人間性や個人と家族、組織、地域、社会、国家の関係を描く必要があるのです。江戸時代人が、現代人と同じように、悩み、喜びながら生きてきたことを

描く時代劇が、今日求められてくるのだと思います。「時代劇から現代劇へ」、かつての時代劇から、そろそろ変わる必要があると考えています。

2 大名行列

次は大名行列（だいみょうぎょうれつ）です。1852年に来日したドイツ公使オイレンブルクの記録には、「行列はみな声を立てずに動いていくが、身分の高い人の行列にあっては、前に行く先触れ（さきぶれ）が『下にいろ』、つまり『ひざまずけ』と叫ぶ。それと同時にすべての者が平伏（へいふく）するのである。しかし、われわれは大名行列に何度も出会ったことがあるけれど、これは一度も見なかった習慣であった。民衆は恐れて道を避けるが、この権力者をさほど気にしていないのが常であった。われわれの見たところでは、大部分の者は平然と仕事をしていた」（『オイレンブルク日本遠征記（にほんえんせいぎ）』）と、記されています。これも、言われてみると納得できることで、浮世絵には、手前に大名行列が通り、奥に農作業をしている農民が描かれている作品があります。江戸時代の参勤交代は、基本は3月から4月の間に江戸にいる大名が入れ替わるシステムです。全国のおよそ260の大名のうち、老中（ろうじゅう）や奉行（ぶぎょう）など在府の大名を除き、130が領国にいます。残る130が国元にいます。その人たちがいっせいに参勤交代をするわけです。

したがって、この時期の街道は、大変な大名行列のラッシュで、行列の宿をとる担当者が大変苦勞をしています。このような大名行列ラッシュで、たとえば、下りの大名が200人も300人も通って、その間、農民が仕事を中断して道端で平伏し、顔を上げたら今度は上りが来るということもあり得ます。その間じゅう平伏していたら、仕事になりません。ということで、お互い見て見ないふりをして、やりすごしたわけです。これも、日本人の知恵だと思います。ともすると、身分の高い人が来たら、必ず農作業をやめて、平伏する、さもないと斬り捨て御免になってしまう、などと思いがちですが、実際にそのようなことはなかったのです。この参勤交代制度は、今日の私たちの生活とも、無関係ではありません。3月に藩主が国元に帰り、4月から新しい藩政が始まるわけです。そして、その藩主は、3月まで国元に滞在し、また江戸へ帰る。国元では藩主がいない1年が始まるのです。そう考えると、なんとなく今の4月の年度始めとも共通します。先頃、東京大学がグローバル化を理由に、秋の年度始まりを提案したのですが、各大学、各教育機関はあまり乗り気でなくて、結局は腰砕けになってしまいました。それは、やはり日本の4月スタートが、かなり社会に根づいており、これを変えるのは、グローバル化しつつある今日でも難しいことを示しています。それは、江戸時代以来の4月始まりの習慣と深くかかわっているともいえます。

3 高札に集まる庶民—識字率の高さ—

次は、高札に集まる庶民です。かつて時代劇では、高札場のシーンで、みんな字が読めない。そこへ浪人、名主（なぬし）、僧侶などが来て、読んであげる。すると、みなは「そうか、そうか」と、理解して散ってゆくというシーンが見られました。しかし、最近の江戸時代研究は、こうしたシーンを否定しつつあります。たとえば、村役人の選挙などの入れ札（投票用紙）を見ると、みな筆跡が違います。ということは、村の農民たちが、自分の意志で、庄屋（しょうや）の名前を書いていたのです。識字率といっても、自分の名前が読める、住んでいる町村名が読める、少し字が書けるなど、さまざまなレベルがありますが、江戸の庶民も何らかの形で字に接触し、それぞれのレベルで文字や文章になじんでいたのです。

すなわち、江戸幕府は、名主、浪人、僧侶が、やって来て読んでくれるのを前提に、高札や触（ふれ）、達（たっし）を出していたのではなく、庶民が直接読むことを期待して出していたのです。

4 江戸時代の女性像の変化－抑圧された女性像から自立的・社会的な女性像へ－

そして、江戸時代の「女性イメージ」ですが、これも儒学（じゅがく）の「三従（さんじゅう）の教え」、親に従い、夫に従い、子に従うなど、抑圧されたイメージで語られてきたのですが、1858年に来日したイギリス公使館書記官のローレンス・オリファントは、「しかし日本の女性が、世界の中で自分たちが1番虐待されていると思っているなどと想像してはいけません。それどころか、おそらく東洋で女性にこれほど多くの自由と社会的享楽とが与えられている国はないだろう。女性の地位は東洋よりも、むしろ西洋で彼女たちが占めているところに近い。そこでこれらの女性は隔離されることなく、劇場にも、食事にも、遊山（ゆさん）にも、また草花の展示会にさえも出かけ、思うままに振る舞うのである。彼女たちは水上の遊楽（ゆうがく）が大好きで、またギター（三味線）に堪能（たんのう）である。女性たちは踊りも達者なのである」（『エルギン卿遣日使節録（きょうけんにしせつろく）』）と、豊かな日常を送っている江戸の女性を評価しています。言われてみると、こちらの女性イメージも、私たちは納得できるところでもあります。要するに、江戸社会は、これまで私たちが、教科書や時代劇から受けてきたイメージとは異なる、「平和」で「文明化」された社会だったのです。

II 「平和」の到来と文字社会－江戸前期－

1 社会への胎動－宣教師の報告－

では、この「平和」と「文明」は何によって支えられ、基礎づけられていたのでしょうか。早く戦国末期に来日したイタリア人宣教師ヴァリニャーノは、「子どもの間で聞き苦しい言葉は口に出されないし、我らのもとで見られるように、平手や拳（こぶし）で殴り合って争うということはない」（『日本巡察記（にほんじゅんさつき）』）と、非常に礼儀正しく、暴力的でないことを驚きをもって記し、「ことごとくの日本人がまるで同じ学校で教育を受けたかのように見受けられる」（『同』）と、行き届いた教育を評価しています。

2 文字社会の成立

一方、文字社会の成立を促したのが、兵農分離（へいのうぶんり）という制度です。中世までの武士の多くは農村にいて、「いざ鎌倉」というと、農民を引き連れ戦場に行き、戦いました。そして、戦場で多くの首を取れば、手柄になり、領地がふえ、出世する。そういう社会だったのです。

しかし、江戸時代になると異なります。兵農分離のもと、武士は城下町に集住し、農村に住む農民に年貢や普請（ふしん）などの指示を、高札、触、達など、文字を通して行いました。農民も願い事や報告事項は、これも文字で武士に伝えなければなりません。要するに、居住空間が遠く離れたことが、文字を社会に浸透させる要因になったわけです。

同時に、民間で商業が発達し、地域間の交流が活発化すると、さまざまな帳簿や手紙のやり取りなども活発化します。これをフランソア・カロンは、「勘定（かんじょう）は正確で、売買を記帳し、一切が整然として明白である。加減乗除比例（かげんじょうじょひれい）まで整数分数ともでき、そ

うして和蘭（オランダ）におけるよりも、また速算家でない尋常（じんじょう）の和蘭人が計算するよりも、一層迅速（じんそく）で正確である」（『日本大王国志（にほんだいいおうこくし）』）と、日本の民間社会の文字や計算のリテラシーを高く評価しています。

農民たちも、勉強します。どうすれば生産が増えるか、自ら農書（のうしょ）を読んで勉強するわけです。今のガーデニングのテキストと同じです。農書はベストセラーにもなっており、そこには、「分限相応（ぶんげんそうおう）にそろばんを習わせる」（『百姓伝記（ひやくしょうでんき）』）などと記されています。

元禄時代の大坂の作家井原西鶴（いはら さいかく）は、「近年人のありさまを見るに、いづれか愚かなるはひとりもなし。昔は、ありのままに書く筆者は、五町七丁（ごちょうしちちょう）のうちにはいなかったんだけど、今は物書かぬという男はなく（みんなが字を書くようになってきた）」（「西鶴織留（さいかくおりどめ）」『日本古典文学大系48』）と、記しています。

これと並行して、社会全体の教育への関心も高くなり、元禄（げんろく）時代、香月牛山（かづきぎゅうざん）は、「女の子も7,8歳から12,3歳まで手習い所につかわす」（『小児必要養育草（しょうにひつようそだてぐさ）』）と、述べています。

福岡藩士で儒学者の貝原益軒（かいばら えきけん）は、「「あいうゑを」を平かなに書て、たてよこによませ、書きならはしむ、また世間往来（せけんおうらい）の、かなの文の手本をならはしむべし」（『和俗童子訓（わぞくどうじくん）』）と、五十音表を作って、子どもたちに縦横に読ませる、「あいうゑお」「かきくけこ」と、「あかさたな」「はまやらわ」と、読む練習をさせなさい、と言っています。すなわち、今日の私たちと同じ五十音の勉強法を、江戸時代の子どもたちも、寺子屋で学んでいたのです。

益軒は「世間往来（せけんおうらい）」を用いて、仮名文字を習わせなさい、とも記しています。往来というのは、手紙のことです。もともと手紙文が、手習いの教科書だったことから、テキストは往来物とよばれ、各地で普及していきました。商人は「商売往来（しょうばいおうらい）」を、職人は「番匠往来（ばんじょうおうらい）」を勉強しました。

三井越後屋、「三越」の奉公人（ほうこうにん）採用の基準を見ると、字が書けて、そろばんができて、弁舌（べんぜつ）が得意な人、こういう人を選びなさい、と書いてあります。入社条件というわけです。

1660年くらいを境に、列島は大開発が終息します。これ以上開発すると、山が枯れ、災害が増えると、幕府や藩は開発禁止令を出します。これをうけて、農民たちは、単位面積当たりの生産力を上げ、生活を良くしようと努力します。その結果、農民の間に農書が普及するのです。「清良記（せいりょうき）」「百姓伝記（ひやくしょうでんき）」「会津農書（あいづのうしょ）」「農業全書」などが、ベストセラーになり、各地で読まれるようになります。

この時期、政治も武力主義から教化政治へと大きく変わります。藩主たちに「名君」が出て、民衆に教育を普及する政策がとられます。

従来の江戸イメージの為政者（いせいしゃ）は、「由らしむべし、知らしむべからず」という考えのもと、政治をしたと言われてきました。すなわち、民衆は賢くなると、いろいろ小賢（こごか）しく主張し、うるさくなる、だから民衆は愚かな状態にしておいた方がいい、と言うものです。しかし、実際の江戸幕府は、決してそのような政策は行いませんでした。幕府は、民衆が賢くなった方が社会は安定する、と考えたのです。これは、今日の私たちも同じです。教育が行き届けば、立場や意見が

違う場合でも、言語で、法にのっとして議論ができ、解決できます。暴力で訴えなくていいわけです。言葉が通じない方が、喧嘩（けんか）や暴力、戦争になってしまう。知恵や知性が、暴力による解決を避ける力になるわけです。教化・教育によって社会が安定する、ということを、江戸時代の幕府や大名たちは知っていたのです。

意識ある藩主たちは、藩校を起し、ブレーンとして儒学者を雇い、藩士たちを官僚として教育する。武力に長ける藩士から学問に通じた藩士へ、と理想の武士像が変化するわけです。武力政治から文治政治（ぶんちせいじ）へと政治も大きく変わったのです。

民間でも教育が普及します。1651年に来日したスウェーデン人の海軍士官ヴィルマンは、「日本人は、上司に差し出す陳情書をきわめて短い、それでいて完全な文を書くが、実に驚くべきことである」（『日本滞在記』）と、日本人が書く願書は、これが非常に簡潔で完全であると記しています。

今日、江戸時代の古文書（こもんじょ）を見ると、全国的に文体や様式が決まっており、農民や町民たちが、文書の様式を学び、自ら要求を記して、訴えていたことがわかります。

元禄時代、長崎の出島から江戸に来たドイツ人医師ケンペルは、その途中で大坂に寄りますが、「この城《大阪城》には、その際注目すべきことは、非番の者が任務を果たして江戸から到着すると、もう一人の者は彼とは言葉を交わさずに直ちに出発し、重要な報告事項は文書にして城内の役所に残しておかなければならないということである」（『江戸参府旅行日記（えどさんぷりょこうにつき）』）と、役人が交代するさい、文書による引き継ぎが行われていることに驚いています。

今日、私たちも任務交代を経験するわけですが、いくら言葉で言っても、ああ言ったこう言った、聞いてない言ったはずだ、とトラブルになります。そこで文書で引き継ぎをするわけですが、これをすでに江戸時代の役人たちがやっていたのです。交代の2人も、「お疲れ様」と一杯やるのかと言ったらそうではなく、相手と言葉も交わさずに入れ替わる、とあります。すべて報告は、文書で行っているのです。ここでも、文書主義の実態がわかります。江戸前期、日本は、すでに「文書社会」・「文明社会」のレベルに到達していたのです。

Ⅲ 8代将軍吉宗の教育改革 —江戸中期—

1 享保改革（きょうほうかいかく）の展開

この「文書社会」・「文明社会」をさらにステップアップさせたのが、8代将軍吉宗です。吉宗の政治である享保改革を一言でいうと、高負担・高福祉の「大きな政府」、「強い政府」を目指す政治でした。すなわち、税金は多く取るが、福祉政策や公共事業を積極的に展開する、というものです。ですから当然、官僚の数は増えます。その分、社会の隅々まで、行政の手が行き届くわけです。

2 官僚制の整備／公文書システム／法典の編纂

この時期、吉宗のブレーンの儒学者、荻生徂徠（おぎゅう そらい）は、献策書『政談（せいだん）』において、どのような役でも職階を頭役（かしらやく）、添役（そえやく）、下役（したやく）、留役（とめやく）の4段にしなさい。軽い役の場合、添役を除いて3段でもいい、より軽い役だったら下役を除いて2段でもいいと提案しています。では、最後に何が残るかということ、頭役と留役です。留役は軽い役で、「一役のことを帳に書き留めさすべし」と、書記官として公文書（こうぶんしょ）を作る役です。他の職階がなくなっても、これだけは外すな、と言うわけです。徂徠は、どの役にも留

帳（とめちょう）、公文書がないのは良くない。だいたい、先例（せんれい）を暗記で覚えて仕事をするが、覚え違いもある。留帳、（公文書）に分類しておけば、手間を取らずに先例を知ることができる。当時はその役職に長くいる人が、内緒で、自分用に覚書を作っているが、自分で勝手に作ったマイノートなので、多くは秘密にして、他人に見せず、自分の手柄ばかりを立てようとしている。新たに後任ができれば、自分に手を下げさせて少しずつ教え、いつまでも自分の部下にしようとするのが当時の風習（ふうしゅう）である、と記しています。なんとなく、現在にも通じるような役人氣質（やくにんきしつ）です。自分のノートを全部渡してしまうと、部下が一人立ちしてしまう、そこで、少しずつ教えて、ずっと自分の部下にしておくというわけです。この結果、あるセクションが一つのかたまりになってしまい、何かトラブルがあっても上司に隠してしまう、として、御役所意識（おやくしょいしき）が出来ていることを心配しています。もし、公文書があれば、新任者もすぐに仕事に取りかかれるのに、「総じて役人茫然（やくにんぼうぜん）として役儀のことに暗きは皆留帳なき故なり」と、徂徠は、役人がぼうっとして仕事が進まないのは、公文書がないからだと言い、みなが見られる公文書システムを作ろうと、提案したのです。

さらに、徂徠は、留帳に書くときは、できるだけ漢字・漢文体で書くように提案しています。日記という、一般に仮名で書くので、文字に個性が出て読みにくい、というわけです。しかし、漢文体は、短くて正確に要件が伝わる。さらに漢字は文字に角が多いので、読みやすい。したがって、漢字を多用する漢文体が読みやすい、と述べています。

漢字・漢文体にして、仮名文字の個性を消し、読みやすくするのは、今日のワープロ、パソコンに繋がってくる発想です。役所の文書は、できるだけ個性のない文字や文章の方が、誤解を防げるという点で優れています。おそらく、この提案を受けてのことと思いますが、将軍吉宗は、積極的に公文書の整理をすすめます。延享（えんきょう）2年（1745）の「達」には、以前は公文書が混雑し、先例がすぐに見つからなかったが、享保8年（1723）以後は、帳面や帳簿が年分け、種類分け、地域分けにされ、「旧例見合に差し支え之れ無き様に仕り候事（きゅうれいみあわせにさしつかえこれなきようにつかまりそうろうこと）」と、古い事例をすぐに参照できるようになったとあります。公文書の威力が発揮されたわけです。

しかし、一方で、混乱も起きています。元文元年（1736）の幕府の「達」には、「少しのことも文書で取り扱うので、事に慣れないものは文書を専らとして実意をうしなひ」と、文書作成に多くの時間を費やす代官らを叱るものもあります。代官たちにとっては、文書作成にあたり、さて書き始めは、「一札之事（いっさつのこと）」か、「乍恐以書付奉申上候（おそれながらかきつけをもつてもうしあげたてまつりそうろう）」か、差し出し人の順番は、宛名の高さは、などと悩んで時間を費やしてしまい、肝心の本来の仕事がかえって疎（おろそ）かになってしまう、すなわち、公文書作りに役人たちが振り回される、という事態が起きていたのです。これは私たちも、ワープロ、パソコン導入の当時、いろいろな会社や役所などで、不適應のトラブルがあつて悩んだという話も聞きました。言葉で伝えていたペーパーレスの時代から、文書によるペーパー化時代へと変わるプロセスで、こうしたトラブルや苦勞が江戸の人々にもあったのです。

3 社会の変化

今日、歴史資料が、各地の博物館や資料館にたくさん残されていますが、その中で江戸時代の文書は圧倒的な量を誇ります。伊予松山の犬月履齋（おおつきりさい）は、以前は、「口上（こうじょう）」、

すなわち言葉で覚えて相手先に行って伝えていたのが、「口上書（こうじょうがき）」を作成するようになり、口上書で済んだのが、印を押すようになった。昔は役所に硯（すずり）が一つあれば済んだのに、最近は一一人が硯を持つようになったものの、それで、役人は暇になったか楽になったか、と言うとそうではなく、かえって、忙しくなってしまい、紙も大量に使うようになった、と記しています（『燕居偶筆（えんきょくひつ）』）。私たちも同じで、一人一人にパソコンが渡ったらみんな楽になったかという、その分の仕事が増えて、かえって忙しくなった、という経験をもつ人も多いと思います。江戸の役人たちも、同じような経験をしていたのです。そして、こうした文字社会、文明社会が、一方で官僚主義を育て、力による解決ではない、話し合いによる、あるいは法による解決、すなわち、「平和」社会の進展を基礎づけたのです。

4 国民教育の振興／郷学（ごうがく）への援助

吉宗は、中国の清で作成された「六諭衍義（りくゆえんぎ）」を寺子屋のテキストとして普及することを奨励します。さらに、幕府の法度（はつと）（法律）を手本に、手習いをさせている塾があったのを褒め、これを広く各地ですすめています。今日でいうテキスト指定をして、授業させようとしたわけです。郷学（民間私塾）に援助しています。菅野彦兵衛（すがのひこべえ）（兼山）が「塾を開きたい」と目安箱（めやすばこ）に投書すると、吉宗は江戸の深川（江東区）に土地と資金を与えます。これを聞いて、大坂の儒学者中井竹山（なかいちくざん）は、「始て平民まで高い講習の所を得たり」（『草茅危言（そうぼうきげん）』）と、民衆が高いレベルの教育を受けるようになったと、評価しています。これに刺激されて、大坂でも享保11年10月に私塾の懐徳堂（かいとくどう）を準官学として保護するようになりました。これは、享保9年、将軍吉宗が京・大坂にも学問所をつくりたいと側近に言ったことが、大坂の中井塾庵（なかいしゅうあん）に伝わり、懐徳堂設立へとつながったものです。日本の東西の大都市で私塾が出来、教育が充実したのです。

5 記憶から記録へー文書主義の浸透ー

文書主義の浸透について、財津種爽（たからつ しゅそう）は、昔は、用事のさいに手紙を取り交わすのは稀（まれ）で、使いが口上を述べた。女中たちも、みな下女を遣わして、口上で用事を伝えていた。したがって、紙は、近年の十分の一もいらず、値段も安かった。ところが、近年は口上で済むことも、書状を用いるようになり、しかも封をして、封じ紙まで使うようになった。半切り紙も昔はなかったが、60年以前ころから使うようになるなど、紙社会へと移行したことを記しています（『むかしむかし物語』）。

多摩郡の落合村（多摩市）の文書には、「尤（もっと）も老人の語り伝えしことは証拠無きなり」と、それまでは老人の語ることは大切にされ、村の歴史になっていたのですが、どうも老人は自分の都合の良いことばかり話すのではないかと疑われるようになり、史料をもとに、村の歴史を書くべき、という主張が出てきます。吉宗の時代、国家や社会が、飛躍的に文書に価値をおくようになるのです。

IV 国民教育の発達と普及 ー江戸後期ー

1 郷学の増加、手習所（てならいじょ）（寺子屋）の普及

吉宗の享保改革における、教育改革を経て、江戸後期には全国各地で、武士や民間の教育熱が高まり、国民教育が飛躍的に発達します。さまざまな教育論が出て、多くの藩が競って藩校（はんこう）を建てます。藩が民衆のために建てる郷学（ごうがく）（郷校（ごうこう））も広がり、民間の富裕者が資金を出し合う郷校も設立されます。

そして、最終的には明治初年において、全国の手習所約1万5000、私塾1500がカウントされるに至るのです。しかし、実数はこれでは収まらないとされています。ある人が塾を始めて、亡くなって塾を閉じてしまうケースなどを考えると、もっと多いはず、というわけで、実際は手習所約7万5000、私塾6500との推計もあります。この数は平成17年度の全国の小中学校の数、3万3870校と比べても、驚くべき数です。当時の教育熱の高さがうかがえます。

しかも、現代は義務教育で、就学しないと法律で罰せられるのですが、江戸時代は異なります。江戸時代には、就学の義務はなく、罰されません。江戸時代、親がこれほど熱心に子どもたちを手習所に通わせたのはどうしてか、一体、何がこのような「教育爆発」を引き起こしたのか、これは大きな謎です。その1つのヒントになると思うのが、次の江戸の小話（こばなし）、笑い話です。「わしが小僧め、此頃（このごろ）大ぶん手があがりまして」「これは結構な事、どれ清書を見ませふ」「アイ皆な草紙（そうし）は、お師匠様へおいてきやした」「そんなら、なんぞ書いて御目にかけろ」「アイなんといふ文字を書かふね」「ハテなんでもいいわさ」「そんなら百の字を書かふ」と大文字ですつと一という字を書くとき親父は、「まづひやの字が出来たり」。親父さんは子どもが字を書けることを自慢したくて全部書くのを待っていられないのですね。これは、「親ばか」の笑い話ですが、私は意外と重要なことを伝えているのではないか、と思っています。今日、お金があるのに給食費を払わなかったり、いろいろとクレームをつけたりする親が話題になっています。しかし、この小話の親のように、しっかりと子どもを見つめ、一緒に成長を喜ぶ姿を見ると、この江戸の親と今の私たちと、果たしてどちらが教育のことを、子どものことを考えているか、自信がなくなります。私たちは、現代の教育の基本を、今一度根底から考えてみるべきだと思います。

2 杉並区の手習い・私塾

さて、江戸後期、この杉並区域には20か村が存在していました。平成16年度に杉並区立郷土博物館で、「杉並に学校が誕生した頃ー明治期前半に公立学校の原点をさぐるー」という、特別展がありました。このときに刊行された図録によると、万延元年（1860）、堀之内村では、57歳の農民大石宗壽（おおいし そうじゅ）が師匠となり、牛泉堂東峯（ぎゅうせんどうとうほう）という家塾を開き、6歳から16歳までの男子29人、女子17人が通っています。文久元年（1861）、上高井戸村では平民内藤喜三郎が家塾誠雲堂（せいうんどう）を開きました。ここには、6歳から16歳まで男子29人、女子15人が通っています。その他、区域の私塾の師匠は、士族、神主などが勤めています。地域のさまざまな人が多様な教育をしていたことがわかります。そこへ子どもたちが通っていたのです。先の誠雲堂や、大宮前新田の三顧堂（さんごどう）は、「東脩随意（そくしゅうずい）」（入塾料自由）であり、貧しい親たちは、野菜をもって、子どもの入門を頼んだことと思います。このように、教師と親の教育熱に支えられた地域の教育活動があったのです。

また、テキストである往来物（おうらいもの）も、「名頭（ながしら）」「百姓往来」「商売往来」な

どが、区内で発見されています。近代日本の教育は、明治政府が突然始めたのではなく、それ以前の江戸時代から地域の中で自主的に起こっていたのです。

明治8年、第3中学区（杉並区域）に公立4小学校が誕生します。来年創立140周年を迎える高井戸小学校は、こういう環境の中から生まれてきます。桃井第一小学校も生まれます。直接現在につながる学校の姿が見えてくるわけで、当初は村々がお金を出しあって、学校を運営したのです。

史料が少ないこともあり、残念ながら、この杉並区域の教育史の研究はいまだ未解明な部分が多く、地域がどのように学校に関わっていたか、今後の重要なテーマになっています。

3 外国人の驚き

以上に見てきた江戸の「教育」の普及と「文明化」を、文化8年（1811）に幕府役人ロシアの海軍少佐ゴロウニンは、「全体として一国民を他国民と比較すれば、日本人は世界を通じて最も教育の進んだ国民である。日本には読み書きできない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もいない」（『日本幽囚記（にほんゆうしゅうき）』）、「だから国民全体を採るならば、日本人はヨーロッパの下層階級よりも物事に關しすぐれた理解をもっているのである」（『同』）と、記しています。この他にも、世界を見てきた多くの外国人たちが、far east 世界の東の果ての小さな島国に、このような「文字社会」「文明社会」があった、と驚いているのです。文政（ぶんせい）3年（1820）に来日したオランダ商館員のフィッセルも、「私には日本人ほど好んでペンや筆を振るう国民があるのを信じられない。彼らはあらゆることを文書にして取り扱う。また一般的にも広い範囲にわたって手紙のやり取りを続けているので、婦人ばかりか男子も、このために時間の大半を費やしている有様である」（『日本風俗備考（にほんふうぞくき）』）と、国民みな手紙を書いている、と驚いています。さらに安政5年（1846）に来日したドイツ人博物学者のアレクサンダー・フォン・シーボルトは、習字の指導は先生は清書を朱墨（しゅぼく）でなす、と今日の習字の教え方と同じ方法を記しています。江戸後期、地域や身分の違いを越えて、「文字社会」「文明社会」が発展していたのです。それを外国人たちが、驚き褒めていたのです。

おわりに

以上、265年間という、世界でも稀に見る江戸の「平和」と「文明化」の実態をお話ししてきました。そして、この「平和」と「文明化」は、地域の教育が下支えしていました。もちろん、人間社会ですから、喧嘩やトラブルも起こります。しかし、江戸の人たちは、暴力や戦争を回避するための内済や、法律・裁判などの知恵や方法を、しっかりと身に付けていたのです。

江戸の教育は、地域や身分を越えて国民的規模で発達しました。江戸時代は、武士のみならず庶民が教育の対象となり、さらに庶民自身が主体的に学ぶ姿勢を獲得した点において、国民教育の形成期でした。明治維新によって、初めて国民教育が起こったのではないのです。明治政府が、地域差・身分差を否定する廃藩置県（はいはんちけん）や身分制廃止などの諸政策を打ち出したさい、大きな混乱や抵抗なしに実現した前提の一つに、「江戸の教育力」があったのです。明治政府の統一的な教育制度は、決して「江戸の教育力」を否定して始められたものではなく、むしろこの延長上に達成されたのです。「江戸の教育力」は、まさに近代日本の知的基盤（ちてききばん）を形成したといえます。

さきほど、杉並区の江戸末期の私塾の例を見ましたが、明治政府はこうした江戸の教育発展の上に、

新しい学校制度を普及していったのです。そう考えると、あらためて江戸時代の、就学率・識字率の高さが注目されます。江戸の「教育爆発」は、庶民の主体的な学習への高い関心や、強い意志に基づくものであったと言えます。

今日、未来に向けて、社会が、保護者が、さらには児童・生徒自身が教育の意義を認識し、学習の楽しさを理解できるよう環境を整備する必要があります。今日の教育改革の本質は、ここに求められるべきと考えます。教科書が厚くなったり薄くなったり、授業日数が多くなったり少なくなったり、世界の成績ランキングが上がったり下がったりなど、とにかくこうした話題が、教育改革の議論を飾りがちですが、これらは教育改革の本質ではないと思います。むしろ、子どもたちが主体的に勉強できる環境を作る、面白がって勉強する環境を整備する、そこにこそ教育改革の本質を求めるべきだと思います。

そして、その先には、「平和」「文明化」と「教育力」の相互関係を、捉え直す作業も必要です。江戸の「平和」「文明化」の達成は、地域と教育の関係をあらためて問う視点にもなります。

今日、世界の各国・各地域が、さまざまな格差を縮小しつつ、それぞれの個性を発揮すること、すなわち同質性と異質性、普遍性（ふへんせい）と個別性の共存は、人類史的な課題となっています。こうした理念を実現するのは、武力でなく、「平和」「文明化」を推し進める人類の意志と知恵だと思います。

暴力や格差を伴わない、真のグローバル化を実現するためには、世界規模で武器を管理するシステム、武士が刀を持っていても使わないのと同じ意識が重要です。その根底には、世界中で「人命」や「自然」を尊重する意識が、形成・共有されなければなりません。こうしたシステムの開発や、意識の形成を基礎から支えるのは、世界規模での「教育力」だと思います。

江戸の教育の多様な実態と発展の考察は、実は日本の将来のみならず、世界の将来を構想する起点としての意義も持っているのです。江戸の教育を、杉並区でもう一度見直す、そして、日本へ、さらには世界へ向けて発信する、今日の杉並区の教育活動の発展・充実化の意義は、決して小さくないのです。

登壇者プロフィール

地域運営学校成果検証調査の結果概要（中間報告）

■金藤 ふゆ子（かねふじ ふゆこ）

文教大学人間科学部教授

茨城県出身。筑波大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学）。東京都教育研究所等の勤務を経て、平成 25 年より現職。専門は社会教育学、生涯学習論、教育調査法。主な著書に『生涯学習関連施設の学習プログラム開発過程研究』風間書房(2012)、『児童の放課後活動の国際比較』福村出版・共著（2012）、『生涯学習社会の構図』福村出版・共著（2009）などがある。

シンポジウム「地域と共にある学校 –対話と協働と創造の教育を目指して–」

■生重 幸恵（いくしげ ゆきえ）

天沼小学校・天沼中学校学校運営協議会委員・文部科学省第7期中央教育審議会委員

1956 年北海道生まれ。PTA 会長時代から学校を支援する活動を積極的に行い、その経験により、平成 14 年 7 月に NPO 法人スクール・アドバイス・ネットワークを設立。学校教育支援における地域活性化を目的として活動し、全国各地でプロジェクトに参画している。一方、企業の教育支援活動の推進にも助力し、社員研修やフォーラムなどを通して、教育貢献の必要性とその方法などについてアドバイスし、企業の持っているノウハウを学校授業に繋げるためのプログラム作成なども手掛けている。

■金藤 ふゆ子（かねふじ ふゆこ）

文教大学人間科学部教授

■長 俊介（ちょう しゅんすけ）

富士見丘中学校学校運営協議会会長・NPO 法人日本スクールソーシャルワーク協会会長

1956 年東京都生まれ。1981 年より自宅を開放し、いろいろな子どもたちと様々な場面で、泣いたり笑ったり、怒ったり怒られたり、たくさんの思いを受けとめて 33 年。そんな子どもたちの代弁者になればとの思いで活動を続ける。自宅から出られない子は訪問してサポート。富士見丘中学校とは、学校評議員として関わって以来 13 年になる。2000 年 6 月に NHK 総合テレビにおいて活動が紹介される。NPO 法人ピアサポートネットしづやスーパーバイザー。NPO 法人修復的対話フォーラム副理事長。

■谷原 博子（たにはら ひろこ）

桃井第四小学校学校運営協議会委員・桃井第四小学校支援本部学校・地域コーディネーター
「アナウンサーの経験から子どもたちにインタビュー講座をしてもらえませんか？」

これが学校と関わるきっかけでした。現在は社会教育の現場を経験しながら、子どもの学びと大人の学びが触れ合い、多くの世代が交流をし、このまちで暮らしてよかったと思えるようなコミュニティになればと思い、学校運営協議会の一員として活動しております。

コミュニティ・スクールの指定から10年、私自身もこのまちで暮らすことを楽しんでいます。

■小原 潤（おはら じゅん）

方南小学校校長・方南小学校学校運営協議会委員

足立区、世田谷区で小学校での教職経験を積み、杉並区では16年間小学校教員として勤務をしている。杉並区では、高井戸東小学校教諭、大宮小学校副校長を歴任し、現在方南小学校の校長を務める。副校長時代より、家庭、地域、学校をつなぐ要（かなめ）としての役割を大切にしている。

記念講演「江戸の教育システムに学ぶ」

■大石 学（おおいし まなぶ）



東京学芸大学教授・高井戸小学校学校運営協議会会長

東京都出身。東京学芸大学修士課程修了。筑波大学大学院博士課程単位取得退学。1997年東京学芸大学助教授のち教授 NHK大河ドラマ『新選組!』『篤姫』『龍馬伝』『八重の桜』等の時代考証を担当。主な著書は『時代劇の見方・楽しみ方(吉川弘文館)』、『新しい江戸時代が見えてくる(吉川弘文館)』など。

来場者アンケート結果

【来場者】

来場者数	資料配布数
265	320

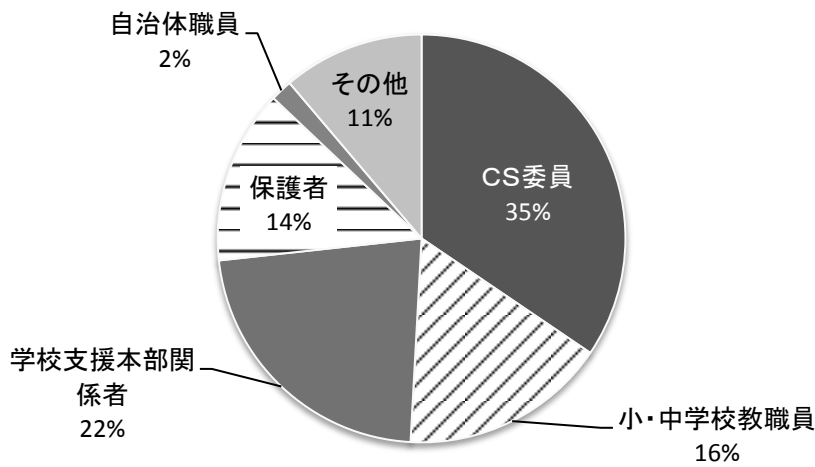
【来場者アンケート実施状況】

配布数	回収数	回収率
245	96	39.2%

1 来場者所属

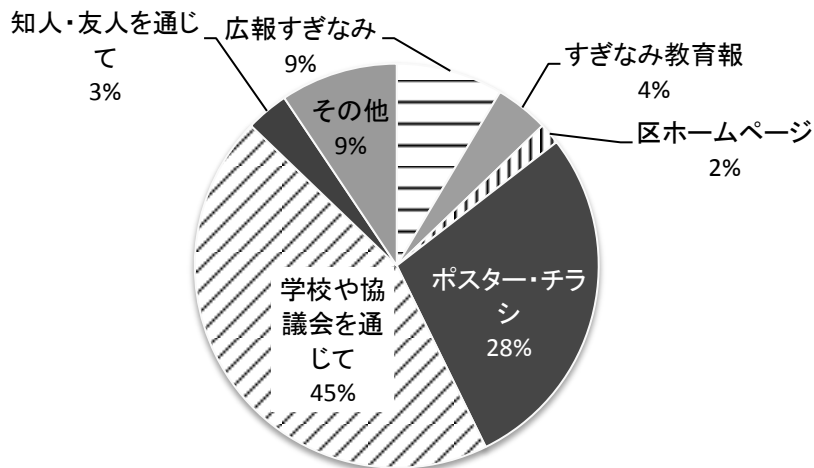
CS委員	小・中学校教職員	学校支援本部関係者	保護者	自治体職員	その他
40	19	26	16	2	13

※所属が複数にわたる人がいるため、所属の各人数の合計とアンケート回収数は一致しません。



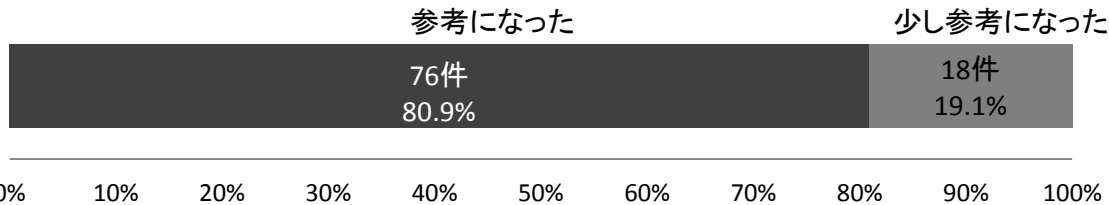
2 知ったきっかけ(複数回答)

広報 すぎなみ	すぎなみ 教育報	区ホームページ	ポスター・ チラシ	学校や協議会 を通じて	知人・友人 を通じて	その他
10	5	2	33	52	4	11



3 内容について

参考になった	少し参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった
76	18	0	0



4 自由意見

【CS委員】

■CS委員として何ができるのか、何をしたら良いのかと日々自問しています。『CSになってマイナスは無い』との言葉が印象的でした。第二部のシンポジウムは面白かったです。井戸端会議への人集めに興味があります。何をすることも人を集めることが課題です。

【教員】

■保護者の方はどのくらい参加していたのかを知りたいと思いました。CS校に勤めていますが、意識の高い家庭は少なく、他校とさほど変わらないと思います。地域の本当の意味での保護者をもっと参加してくるとCSももっと内容の濃いものになると思います。

【学校支援本部関係者】

■他校の取組みがよくわかった。10年前と比べて地域の人や団体の果たす役割が増えていることがよく分かった。今、私は地域の人や団体を学校に結びつける仕事をしているが、各地域の持っている地域資源をもっと知ることができるといいのにと思っている。このような機会があって良かった。江戸の教育システムの話は、目からうろこ。いろいろ面白く拝聴しました。もっとお話を伺いたいです。

【保護者】

■CS校でPTA役員をしています。自校と他校のCSで、委員にPTA役員が入っている学校もあり、疑問に思っていました。今日のお話で、CSは各校の特色を出して発展していくものだということが分かりました。

■CSの意義、効果について大変勉強になりました。PTAとして、CSにどのようにPTAや保護者が関わるのがいいのか。CSが拡大していくとき、PTAがどのようにしていくのがよいか考えていかねばならないと思いました。

【その他】

■CSを継続していく難しさを、人材の育成という点につなげていく意識がすばらしいと感じた。大石先生のお話は、今日の教育や社会システムのルーツが江戸時代にあることが分かり大変興味深かった。

■3部構成の一連の流れがとてもよくまとまって聞き応えがあった。CS委員に興味があった。

■CSの課題、苦労したところ上手いかなかったところが知りたかったが、いいことばかり（いいことが圧倒的に多い）なのではないでしょうか。10年検証は全国でみても大変意義深いことだと思いました。